

## 赤羽末吉の宮沢賢治絵本論

執筆者…上島史子

掲載誌：「絵本 BOOKEND 2013 特集：没後八十年宮沢賢治」絵本学会機関誌編集委員会 二〇一三年

赤羽末吉(1910-1990)は五十歳のときに最初の絵本を発表して以来、日本の絵本のオピニオンリーダーとして活躍し、八十歳で亡くなるまでの三十年間に八十冊を超える絵本を手がけた。子どもの本の最高の国際賞といわれるアンデルセン賞画家賞を、日本人として初めて受賞した画家でもある。『だいくとおにろく』や『スーホの白い馬』など日本や中国の民話の絵本の描き手として知られる赤羽だが、宮沢賢治の絵本も三冊発表している。

赤羽が絵本を描くようになったのは、創刊間もない「こどものとも」に茂田井武(1908-1956)が描いた『セロひきのゴーシュ』(福音館書店 1956)をみて感動し、福音館書店の松居直のもとを訪れたのがきっかけだったという。豊富な語彙で心象を映す賢治の童話は、絵にすることでかえって無限のイメージを限定しかねない危険をはらんでいるが、茂田井のこの絵本は瀬田貞二が「ようやく本文と絵とが齟齬することのない完全な一体、つまり、みごとな絵本になってあらわれた」と評価した一冊である。病床でこの絵本を描き上げた茂田井は、その年四十八歳で早世したが、日本の絵本がまさに隆盛期にさしかかろうとする時期に、この絵本が果たした役割は大きい。

### 『水仙月の四日』(福音館書店 1969)

「水仙月の四日」は、賢治が二十六歳のときに書いた代表作のひとつだ。赤い毛布を着て雪の高原を歩いていた子どもが、雪婆んごや雪童、雪狼の起こす吹雪に巻き込まれる話である。松居直に宮沢賢治をやってみる気がないか問われた赤羽は、賢治の童話のなかからこの難しい作品をあえて選んだという。

旧満州(中国東北部)に十五年を暮らした経験をもつ赤羽には、大陸的な気候とは

対照的な日本の雪国への強い憧れがあった。一九五四年頃から毎年冬になると東北などの雪国を旅した経験が、墨絵で雪を描いて注目を集めた最初の絵本『かさじぞう』（福音館書店 1961）につながった。民話の雪とは全く異質の、硬質で宝石のような賢治の雪を絵にすることは、赤羽にとって新たな挑戦だった。

赤羽は多様化する絵本のなかで、文学と絵とが結びついた「物語絵本」の重要性を度々説いている。物語のおもしろさ、耳に響いてくる日本語の美しさを子どもに伝えるには、作家の力が必要であり、「作家と絵かきとが紙面で巖流島の決闘をやって秘術をつくすべきだと思う」という持論を述べている。宮沢賢治との対決は「魔神に出会った小人のよう」であり、「ふるえるような感動と緊張のなかでからだをぶっつけた体験」であったという。物語の視覚的な解釈に定評があり、絵本の優れた演出家である赤羽にとっても、宇宙的な広がりまで表現し得た賢治の文学の視覚化は難しかったようだ。

赤羽には日々の行動をメモした手帳が残っていて、いつどの絵本を手がけたかをおよそ把握することができる。一九六八年の六月末には『水仙月の四日』のプランに着手している。翌一九六九年は、赤羽がアメリカ大使館の仕事をやめて絵本画家一本でいくことにした年で、他にも多くの絵本や挿し絵を手がけているが、集中的にかけた時間はこの絵本がもっとも長い。二月には雪のイメージをつかむため、長野県の黒姫に建てた山荘に九日間こもった。瀬川康男も泊まりに来て、いっしょに膝まで埋まるほどの雪のなかを歩いたという。雪景色や妙高・黒姫の山々をコンテで描いたスケッチブックが残っており、その表紙の裏には雪の印象がメモされている。「……空は白っぽく光のない光。白い点びようがおしよせてくる×白いはなのむれがゆっくりとうずをまいて動く。その底に木々のほのかな色がある。はなしきり……」。このメモも賢治の抽象的な詩の世界を表現するための試みだったようだ。また、五月には賢治の故郷岩手県花巻まで出かけ、宮沢清六氏に会い、小岩井農場にも訪れている。そして五月半ばから最終プランを練り上げ、イメージの固まった七月二日から十日間で本描きをほぼ仕上げている。

この絵本の構成の仕方については、赤羽自身が「月刊絵本」一九七七年七月号（後に『絵本よもやま話』に収録）で詳しく述べている。「絵は文からはなれよう、はなれることによって核心をつこう。文は比較的空の魔性にウエイトをおいている。私は下の子どもを追うことにしよう。そして、上と下で、文と絵がついたりはなれたりして、全体を構成しよう」。絵本では、文が始まる前に雪の地上をいく赤い衣の子どもと、天上をいく雪狼たちの場所が一目でわかる見開きが置かれている。その後は天と地を自由自在に行き交う文章とまさについたり離れたりしながら、絵も天と地、それぞれの情景を行き来している。

この絵本では、文章だけの頁にも各場面に応じた色が施されている。自然の色彩を見事に表現した賢治の文とあいまって、色がさまざまな光を感じさせ、色の展開でドラマを盛り上げる効果も上げている。

赤羽はそれまでも絵本の主題に合わせて紙や筆を使い分けてきたが、この絵本では硬質な感じを出すために主にボールペンが使われている。他にも墨やコンテの線も使い分け、彩色には日本画の絵の具に加え、水彩絵の具も用いたという。印刷だと分かりにくいのが、銀箔の上に彩色を施した場面の原画は特に美しい。紙も麻紙、画用紙、画仙紙、白チリ紙などさまざまな紙を場面ごとに使い分けている。

「材料も技術も、私のあるだけのものを全部投入して、この作品の持っているものを追求しようとした」というこの絵本は、後年、赤羽が自作の絵本のなかで一番好きだと語る作品となった。

### 『ゼロ弾きのゴージュ』（偕成社 1989）と『ひかりの素足』（偕成社 1990）

赤羽の生涯の最後の挑戦も、宮沢賢治の童話の絵本だった。一九八六年の終わり頃から赤羽は体調に不調をきたしていたが、絵本の仕事はゆっくりしたペースで続けられていた。一九八八年、赤羽は偕成社の日本の童話名作選シリーズの一冊として『ゼロ弾きのゴージュ』に取り組んだ。この童話は賢治が最後まで推敲を加え続けた最も完成度の高い作品といわれている。茂田井武へのオマージュでもあったの

かもしれない。しかし、赤羽はこの仕事に大変苦しんだようだ。一月末からこの本のことを考え始めるが、手帳には「見当もつかずこれは難題」「賢治ものはむずかしい」ということばがたびたび書きつけられている。半年近くをかけて編集者に絵を渡すが、満足のいくものではなかったのではないだろうか。

だが、赤羽は賢治への挑戦をやめなかった。体力的につらそうであったため、編集者から催促をすることはなかったというが、一九九〇年四月、『ひかりの素足』が刊行された。これは吹雪のなかで遭難した兄弟が現世と他界の境界をさまよい、ついには弟思いの兄ひとりが生還するというかなしい物語だ。賢治の描写する吹雪、そして地獄のさまは息もつけないほど恐ろしい。赤羽が長年追求してきた雪と鬼、その恐ろしさを追求したいと考えたのだろうか。ぞつとするような気配に満ちた絵本となった。

『ひかりの素足』の初版の著者紹介には、「宮沢賢治の童話の絵入り本は『ひかりの素足』『グスコープドリの伝記』『風の又三郎』『ポラーノの広場』『銀河鉄道の夜』を予定」と書かれている。しかしこの絵本が発表されてまだ間もない六月八日に、赤羽末吉は八十歳の生涯を閉じた。あとには「風の又三郎」の構想画や、編集者から渡された賢治童話に関する資料などが残された。

赤羽末吉にとって、賢治はもつとも巨大な魔人であったのだろう。宇宙の大きさ、地質時代から続く歴史さえ表現することのできた賢治の文学は、まさに赤羽が描きたいと願った「壮大なロマン」そのものだ。賢治の世界を絵にすることの難しさを知りながら、なお挑もうとし続けた赤羽の賢治絵本を、もつと見てみたかったと思う。